

THE JAPAN AGRICULTURAL NEWS

日本農業新聞

\\ 私の \\ 記事活用 エピソード集

コラムの
切り抜きで
自己啓発

地域の
課題解決に
チャレンジ!

組合員との
関係を深める
きっかけに



はじめに

日本農業新聞は令和2年3月に本紙「私の記事活用エピソード」の最優秀賞以下優秀作品を決定しました。「私の記事活用エピソード」は日本農業新聞に掲載された記事の中から営業や生活、勉強に役立つ記事を、読者の皆様からエピソードとともに広く募集したもので、記事を起点にどのような変化、発展があったかを紹介していただくものです。人気コラムや企画からヒントを得て、新たな一歩を踏み出した事例、JA自己改革の活動の中で本紙を活用し、組合員との距離を縮めた事例、農作物情報や栽培技術を、営農や教育に生かした事例など、応募いただいた本紙活用のエピソードは多岐にわたりました。全国の読者の皆様から252点の応募をいただき、厳正な審査の結果、上位13作品を入賞とさ

代表取締役社長

穴久保光雄

させていただきました。応募いただいたエピソードを審査する中で、読者の皆様がどのような視点で記事に触れ、どのように活用されているかを知り得た事は、新聞を制作する立場の我々にとっても、学ぶべき点が多くありました。応募いただいた作品につきましても、社内でも共有し、新聞制作に役立ててまいります。

日本農業新聞は今後も、農業、地域社会、そして読者の皆様が抱える課題、問題を注視し、営農、生活、くらしに役立ち、ためになる情報を現場目線で発信してまいります。御愛読いただいております、読者の皆様におかれましても、今回の入選エピソードを参考にしていただければ幸いです。

目次

- はじめに
- 最優秀賞
鏑流馬 齊氏（JA鹿兒島県中央会）
- 優秀賞
阿久津 晃一氏（栃木・教諭）
谷口 誠氏（滋賀・JAこうか）
- 審査員特別賞
梶澤 美佐江氏（北海道・農業）
奨励賞
畑 裕樹氏（群馬・農業）
遠藤 一秀氏（JAさいたま）
- 鈴木 仁氏（JAあいち豊田）
小林 英雄氏（三重・農業）
清水 翔太氏（滋賀・JAこうか）
宝本 凧世氏（同）
- 中村 匡登氏（同）
堀内 佳代子氏（奈良・農業）
江越 正和氏（山口・農業）
応募のお礼
- 「記事活用エピソード」募集のご案内

- 受賞者の所属や職業は応募時点のものです。
- 審査は、福井県立大学の北川太一教授（審査委員長）、農業ジャーナリストの青山浩子氏、JA全中の石室真弘常務、日本農業新聞社長の穴久保光雄により、厳正に行われました。（所属や肩書は令和2年3月の審査時点のものです）



J A 鹿児島県中央会

鏑流馬 齊氏

「四季」は私の小さな図書館

本紙コラム欄「四季」の記事を切り抜き、大学ノートに貼付するのが私の日課となっている。

きっかけとなったのは、平成27年11月26日付の記事。「ペンの日」にちなみ、不屈のジャーナリスト、むのたけじさんを引き合いに、安倍政権の官邸主導の在り方にメディアはどう向き合っていくべきか、自戒を含めた内容だった。

新入職員の頃、広報を担当したことがある私はこの記事に触発され、



自分の浅学を恥じ、少しでも教養を深めようと、今日まで一日も欠かさず切り抜きを続け丸4年になる。ノートも4冊目に入った。

わずか520字ほどのコラムだが、ベテラン記者の豊富な経験と知識・教養による実に洗練された内容に毎朝うならされている。

この4年間のコラムの蓄積は、私に多くの事を教えてくれた。『寺田寅彦随筆集』や『茨木のり子詩集』他、多くの書籍に巡り合わせてくれた。4冊のノートは、今や私にとって他に類を見ない、情報満載の小さな携帯図書館となっている。

寸評

コラムをこつこつと切り抜くという、なかなかできないことを継続しています。切り抜きを通して知識を増やすだけではなく、自らの意識を高めようとしている点に好感が持てました。

「四季」をまとめたノート。感銘を受けた文章は、マーカーや付箋を付けてすぐに読み返せるようにしています。



●選んだ記事

平成27年11月26日付以降の「四季」

四季

2015・11・26

きょうは「ペンの日」。果たして記者の「ペン」は鋭いメスに代わり社会の深部を切り開き、読者に示しているのか。自戒が込み上がる日とも重なる▼作家・司馬遼太郎さんの「無償の功名心」の言葉がいつも浮かぶ。新聞記者の本質の一つを指す。足と頭で書く。取材の大原則は変わらない。だが、相手が国家、政府となると二変しかなない▼安倍政権になって、そうした場面が確実に増えてきた。官邸主導の情報コントロールがよく効き、具体的記事となり人々の心に入っていく。心象は事実が変わり、別の先入観を育て上げる。農政関連ニュースで貿易自由化、農協改革などが典型だろう。「TPPこそ経済成長に不可欠」農協ヒラミッドに全中が君臨」といった虚実ないまぜの情報だけが独り歩きした▼自民党は週末、結党60年の記念式典を開く。情報管理は長く権力の座にいた源泉に違いない。安倍流の国家介入型政治は経済政策から教育、憲法改正、安保関連法まで及び、結局は暮らして命に結び付く。「百歳の不屈」が似合う老ジャーナリスト、むのたけじさん。今のメディアに「一筆洗いな作り直せ」と檄を飛ばす▼「自分の感受性くらい自分で守ればかものよ。詩人・茨木のり子さんの鋭い（ペン）と（メス）に自戒は深まる。」



栃木県立宇都宮白楊高校 教諭

阿久津 晃一氏

トレンド調査 農高生の教材に

●選んだ記事 平成31年1月7日付 「経済流通特報」2019トレンド①野菜

毎年、年初めの楽しみにしている記事に農産物のトレンド調査がある。記事から今年ヒットすると予想される野菜のランキングや消費者の要望などが分かる内容だ。

私は農業高校で野菜を担当している。今年注目した野菜はブロッコリーだ。種苗会社のカタログを生徒たちと眺め、調理勝手の良い品種を見つけ、種まきをした。出来たブロッコリーは近隣の小学校の給食で交流会をして食べた。

1年生には野菜作りの楽しさや面白さ、2年生には品質や味の向上など実際の栽培技術、3年生には将来の経営ビジョンや自分の家の経営改善などの将来像を伝える教材として記事を使い分けて活用している。



最近、生徒の進路先として、農業生産法人を含め、本校で就農を希望する生徒が少しで

あるが増加傾向にある。将来、地域の農業を支える農業人になって、日本農業新聞の記事に載るような生徒が出てくることを期待している。

調理は「時短」■用途の広さも

個性「使い勝手」

味や香り…特徴ある品種を

①野菜 本紙調査から

「安定供給」

鍵握る産地間の連携

寸評

学年によって記事を使い分けるなど、農業への関心を高める工夫が注目されます。



滋賀県JAこうか

谷口 誠氏

知識得て農家と 関係深める

●選んだ記事 令和元年11月13日付 茶 新機種で経営改善

融資相談員1年生の私が担当している地域は県内において現在、茶の面積、生産量ともトップを誇る茶どころです。

配属当初、茶農家さんと融資のご相談をした際、「ジョーヨー」や「バリカン」という言葉を耳にし、何の事か分からず、うまく会話のキャッチボールが出来なかった事を思い出します。後で分かったことですが、「ジョーヨー」は兼用型摘採機であり、「バリカン」とはバリカン型摘採機のことでした。

そんなことをきっかけに私の記事を読む目線は茶関連へと変化しました。記事を拝読すると、農政、経済欄には専門記事が、地域欄には季節に応じた取材記事が実に多く載っています。



記事から得た情報を会話に織り混ぜると、随分と会話が弾むようになったと

茶新機種で経営改善

低床型の摘採機 分析粗採も注目

求季に向け展示会

寸評

記事を通じて知識を得て、茶農家との会話を深め、日頃の業務にうまく活用しています。他者や組織、地域への広がりという点で高く評価できます。



北海道芽室町 農業 梶澤 美佐江氏

記事励みに地域の店を守る

●選んだ記事 平成30年10月10日〜18日付 「ここで暮らす」(6回掲載)

私の住む地域ではJA運営のAコープが平成30年3月末で閉店してしまつた。
閉店の計画は5年ほど前からあつたので「この地域には店が必要である」という地域住民が立ち上がり、前年11月末には記事中の広島県安芸高田市の川根地区のお店に仲間の方々が実際に視察に行つている。そしてNPO法人を立ち上げ試行錯誤を繰り返しながら、閉店から2カ月後の5月、開店にこぎつけた。現在、私も理事の1人として運営に携わつている。

「ここで暮らす」というタイトルを見た瞬間、「あつーこれは今の私たち地域にぴったりだ！」と当時むさぼるように読んで記憶がある。記事の中の「強いつながりを生むには軸になるものが必要」「みんなが集まる幸せ」「何気ない会話が心を満たす」とい



う言葉の数々に、その通り！と大いに励まされた。
大変なことも多々あるが「みんなの笑顔があれば大丈夫！」と私は希望的観測を持つている。ずっと「ここで暮らす」のだから...



寸評

記事に励まされ、地域の方たちと店舗運営に奮闘する、梶澤さんの気持ちに共感できるエピソードです。



群馬県伊勢崎市 農業 畑 裕樹氏

市況活用し出荷計画

●選んだ記事 「青果市況」「日農INDEX」

「過去を知って、今を判断。今を理解して、未来を予測」。
そんなことを可能にしてくれたのが、新聞の「青果市況」とnetアグリ市況の「日農INDEX」です。
メリット①、単価及び取扱量については、5カ年平均と現在のデータを照合し、世の中の需給バランスを判断することができる。
メリット②、①を把握した上で自分の出荷計画(kg)を立てる。その際に5カ年平均単価を掛け合うことにより、月間、年間の売上目標を設定

「過去を知って、今を判断。今を理解して、未来を予測」。
そんなことを可能にしてくれたのが、新聞の「青果市況」とnetアグリ市況の「日農INDEX」です。
メリット①、単価及び取扱量については、5カ年平均と現在のデータを照合し、世の中の需給バランスを判断することができる。
メリット②、①を把握した上で自分の出荷計画(kg)を立てる。その際に5カ年平均単価を掛け合うことにより、月間、年間の売上目標を設定



JAさいたま 遠藤 一秀氏

記事掲載で活動加速

●選んだ記事 平成30年4月7日付 おもてなし助成で成果

創造的な自己改革に取り組むJAさいたまは、「おもてなし」をテーマに、組合員の満足度を高める活動を展開してきた。特に、組合員との楽しい思い出や絆づくりが期待できる旅行事業では、旅行取扱額の0.4%を主催する支店の裁量で使える助成金を支給。土産物や試食品の購入に充てるなどして好評を得た。
この記事がきっかけとなり、農協観光の全国表彰を受賞した。これが個人的にも組織的にも大きな転機となり、「おもてなし」を皆で共感(シン

「ここで暮らす」というタイトルを見た瞬間、「あつーこれは今の私たち地域にぴったりだ！」と当時むさぼるように読んで記憶がある。記事の中の「強いつながりを生むには軸になるものが必要」「みんなが集まる幸せ」「何気ない会話が心を満たす」とい



JAあいち豊田 鈴木 仁氏

狩猟免許を取得

●選んだ記事

令和元年8月6日付
大日本猟友会 進む高齢化

日本農業新聞を購読している中で、ジビエとか狩猟に関する記事に興味がありよく目を通しています。

今回のこの記事を読み、狩猟者が高齢化等により減少をされており、先細りしているのだと知りました。自分も農業をされており、鳥獣による被害の大きい山間部等は特に大変なのだろうと思っています。

自宅周辺でもカラスによる迷惑行為が多発しており、自分でも何かできないものかと考えていたところに

この記事が目に入りました。興味があった狩猟免許を取得してみようとな念発起し、まずは網猟とわな猟の免許取得を目指す決意をしました。

10月に申請、11月に事前講習の受講と免許試験を受験して無事合格することができました。今後は地元猟友会に入会して何ができるか考えて、自分のできる範囲で有害鳥獣駆除とジビエを楽しんでいきたいです。機会があれば銃猟免許にも挑戦してみようと考えています。



三重県四日市市 農業 小林 英雄氏

養蚕体験を橋渡し

●選んだ記事

令和元年11月24日付
「クローズアップ」JA三重中央「養蚕の歴史 後世に

私は市内の私立幼・保育園の園児の農業体験学習に協力しています。先日園長先生と今年のお米作りの結果についてのまとめと、来年の計画を話し合う中、「蚕を飼ってみたい」と突如切り出されました。

わが家でも約60年以上前は、両親が稲作のかたわら養蚕をしています。が、今となっては、当時の具体的な資料等は存在せず、返答に窮していたところ、11月24日の東海版で「養蚕の歴史 後世に」の記事をゲッ

トしました。

早速、JA三重中央に電話をし、具体的な養蚕作業の教示や資料の提供を依頼するとともに、園長先生にも連絡をし、今後の進め方について相談されるように伝えました。

まさに、日本農業新聞の全ページが、農業を網羅されていることにあためて感じた次第です。



滋賀県JAこうか 清水 翔太氏

自己改革をPR

●選んだ記事

令和元年10月24日付
住みよい街づくり 全職員で清掃活動

お客さんの家に訪問し、話をしていた際に自己改革の話題になった。その際に「たくさんのお話を聞いて訪問して頑張ってくれているのは知っているけど、何か他に自己改革・3

力年計画として行っている活動はあるの？」と聞かれた。ちょうど数日前に新聞の記事で紹介されていた、実際に自分自身も参加したので「新聞でも取りあげられたんですよ」と紹介した。

甲賀支所では、かふか夢の森で1

時間ほど清掃活動をした。「通りがかりの方も数人おられたので、交流しながら活動しました」と伝えた。

お客さんは「自分が知らないだけでいろんなことに取り組んでいると分かって感心した。日本農業新聞は今までとっているけど、細かい記事も気にしてみる」とおっしゃっていたので、活動と新聞のPRができて良かった。これからJAではこういった活動をしているということをお客さんの方に広めていきたい。



滋賀県JAこうか 宝本 凪世氏

相談応え関係築く

●選んだ記事

令和元年9月2日、16日付「の・えるPLUS」

以前農家さんから「農業に関する情報は、知り合いの農家から情報を得るくらいしか手段がなく、他産地の取り組み情報があまり届かない」との相談を受けた。その時に頭に浮かんだのが日本農業新聞だった。

それ以降、市況での農産物の値動きや、直売所コーナーでの売れ筋情報、他産地での取り組みやスマート農業などの記事に注目し、必要に応じて農家さんとの会話に生かし、時には「このようにしたら売れるのでは？」と自分のアイデアを伝えるよ

うになった。

その中で、農家さんから「6次化の開発を考えている」との相談があり、「の・える」の内容を話した。農家さんからは「女性が頑張っている姿を知り、自分も頑張らねばと感じた。商品開発のヒントにもなった。ありがとう！」と笑顔でお礼を言っていた。日本農業新聞を活用することで、自分自身の知識が増えるだけでなく、JA職員として農家さんと深く関係を築くための肥やしになるのだと実感した。



滋賀県JAこうか 中村 匡登氏

話題づくりを活用

●選んだ記事 令和元年11月10日付 「おまかせ園フタダ流」あせ板何かと重宝

普段複合渉外業務をしており、訪問先に農業やガーデニングをしている方が多いことから顧客との話題の材料にしています。

初めは新聞記事の内容を情報として提供しようと思いましたが、実際話すと相手は経験を積み、人と情報を交換して実践している方ばかりで情報提供できませんでした。そこで記事に載っていることを実践している方がいたら、実際どうかを聞くことにしました。

「良いよ」とか「他にもこんな使い方があるよ」といった反応が返ってきます。そして何回か繰り返しやり取りの中で「他のお客さんでこんなことをしている人がいました」と話すこともでき、情報交換のつながりに入ることができ、農業以外にも話すことができるようになりました。

日本農業新聞は農業、暮らしをよくするための情報が書かれた記事が充実しており、引き続き顧客との話題についていけるよう普段自分が接することが少なかつた農業や暮らしの情報を勉強していきます。



奈良県川西町 農業 堀内 佳代子氏

記事を基に体操教室

●選んだ記事 平成31年4月9日付 骨粗しょう症予防のポイント 令和元年9月23日付 「論点」脊柱後弯症を防ぐ

農業者と脊柱後弯症というのは、昔から密接な関係があると思います。

私の祖母も、女手一つで稲作や野菜・果樹の出荷をしていましたので、円背となり、横隔膜から腸が飛び出すヘルニアを患い、とても痛かりました。また、専業農家のおじとおばも腰のヘルニアを患い、手術を受けました。「これからの時代は、農業をすることで体を痛めることがあつてはならない!!」と思っています。

この2つの記事を参考に、JAなら

けん川西支店で月2回行う体操教室や地域の公民館等で紹介し、掲載されている体操(かかと落とし・スクワット・片足立ち)をみんなで行いました。

農業をされている方々や、背が曲がり、骨粗しょう症で通院している方々にとても感謝され喜ばれました。

この出来事を励みに、ささやかなことかも知れませんが、今後農業で体を痛める人が無いように、食事と運動の大切さを含め、啓発・予防の取り組みをしていきたいと考えています。



山口県防府市 農業 江越 正和氏

新技術導入し成果

●選んだ記事 平成21年2月22日付 トマトに新誘引法

トマト栽培を始めて5年目の頃、面積拡大を計画していた時期に本記事を目にして、この誘引方法を導入した。それまでの誘引方法は、記事にも記載のある慣行の「つる下ろし法」を行っていたが、作業労力がかかりかかってしまい、より良い方法を探していたところだった。

実際に増やしたハウスで導入してみたところ、作業労力の軽減が図れたほかに、受光環境が良くなり、特に冬季の低日照期には、慣行の誘引方法を行っているハウスより生育が

良く、玉太りも良かった。

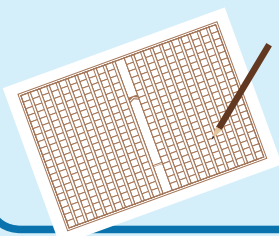
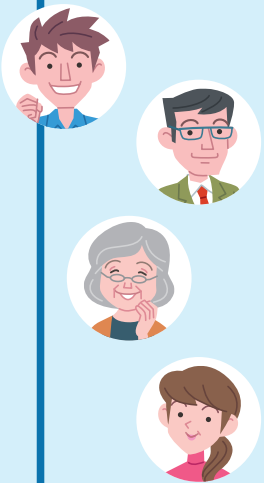
本技術のポイントは、誘引ワイヤーを2本張ること上で向きと下向きの茎間に空間が広がり、葉同士の間が少なくなり、受光性・通風性が良くなることだと思つた。

ワイヤーを2本張る方法は慣行のつる下ろし法にも取り入れ、他の生産者も導入して地域に普及していった。

ご応募

ありがとうございました

「私の記事活用エピソード」募集には、192人の方から252点のご応募がありました。応募者の最年少は21歳、最年長は96歳と、幅広い世代の方から作品が寄せられました。たくさんのご応募、誠にありがとうございました。





記事活用エピソード を募集しています

「日本農業新聞」の記事で、営農や生活、勉強に役立つ記事を読者の皆さんから、エピソードとともに広く募集します。ふるってご応募ください。

応募書類

原稿用紙やWord文書などに次の事項をご記入の上、ご応募ください。

- ① 読んだ記事の見出しと、掲載日
- ② 活用に関するエピソード(400字以内)
- ③ 応募者の氏名、住所(郵便番号含む)、年齢、性別、職業、電話番号

応募方法

- ① 郵送 ② メール —— のいずれかでご応募ください。

応募・ 問い合わせ先

日本農業新聞 普及推進部「記事活用エピソード」募集係 宛
〒102-8409 東京都千代田区一番町23-3

☎電話:03-6281-5803 ✉メールアドレス:suishin@agrinews.co.jp

審査

(1) 審査方法

- 社外識者を含む審査委員会を設置し、応募書類に基づき審査します。
- 応募多数の場合は、日本農業新聞社内で事前審査を行います。

(2) 審査基準

- 当該記事の活用に関するエピソードに独自性があるか。
- 当該記事の活用に関するエピソードに共感できるか。
- 農業・農村の振興や暮らしの改善、協同組合の発展につながる活用か。

表彰

最優秀賞 1点	受賞者には賞状と副賞(最優秀賞10万円、優秀賞5万円、奨励賞5,000円)を授与します。
優秀賞 2点	
奨励賞 5点	

発表

- 入賞した方に直接通知します。
- 最優秀賞と優秀賞の受賞者の方は、日本農業新聞が主催するイベントなどで表彰します。

その他

- 応募作品の著作権および出版権は主催者に帰属します(応募作品は返還不可)。
- 応募作品を冊子やパンフレットなどで紹介することがあります。

応募締め切り

2020年12月8日(火) 必着